

専門的な摂食嚥下ケアを実施し 重度経管栄養者の“食べる”を支援

和歌山県新宮市の特別養護老人ホーム黒潮園(社会福祉法人黒潮園、岡司理事長)では、最後まで口から形あるものを食べることを支援するため、言語聴覚士や理学療法士、看護師、管理栄養士、介護職が連携して経管栄養者への経口併用に取り組んでいます。平成29年度全国老人福祉施設研究会(高知会議)では、この活動を「重度経管栄養者への経口摂取・舌骨上・下筋群マッサージの有効性」と題して発表し、最優秀賞を受賞しました。



社会福祉法人黒潮園
特別養護老人ホーム 黒潮園
和歌山県新宮市三輪崎2471-1
TEL: 0735-22-5689
URL: <http://www.kuroshioen.jp/>

家庭で行われる介護以上の 質の高いケアをめざす

社会福祉法人黒潮園は、1977年から約40年間、和歌山県新宮市で特別養護老人ホーム黒潮園(定員100人)を運営しています。地域のニーズに 대응するため、デイサービスセンター(定員45人)も展開し、2014年には全室個室の地域密着型特別養護老人ホーム(定員29人)も開設しました。

2010年からは、理事長の交代を機に、経験則を重視するケアのあり方の見直しを始め、「医学的根拠に基づく専門的な質の高いケア」という方針のもと、「個別に自立を支援するケア」に取り組んでいます。おむつに依存しない排泄ケアを進めるほか、「摂食嚥下」「リハビリ」「介護サービス向上」など分野ごとに委員会活動を行い、専門的ケアの研究や情報共有、チームケアの実践に努めています。

理学療法士として12年間病院に勤務した経験を持つ同法人の岡司理事長は「ご家族も安心し、ご本人が快適に施設で暮らしていただくためには、家庭での介護以上の質の高いケアを受けていただくことが必要だ」と感じます。看護師や理学療法士はもちろん、介護職も専門性の高い仕事ですが、経験に基づいて行うケアが多く、施設介護では流れ作業になりがちでした。そこで、医学的知識や根拠に基づいてケアを見直すことで、介護の質を高められると考えました」と、その経緯を話します。

職員の専門スキル向上のため、同法人内では「介護技術」や「排泄ケア」「腰痛予防」「接遇」「口腔ケア」「褥瘡」「感染症」「救命」などの分野で定期的に研修・勉強会を重ねるほか、学会など施設外研修への出張支援(補助金・手当)や介護支援専門員資格受験対策講座を実施するなど、職員が専門知識や技術を学ぶ機会を全面的にバックアップしています。

言語聴覚士を交えて、利用者の摂食嚥下機能についてのカンファレンスを行う





鼻腔経管栄養の利用者には、経口摂取の前に看護師がバイタル測定し、経管栄養を注入する



経管栄養注入後30分以上経過し、経口摂取を始める



言語聴覚士の神代さんが利用者の嚥下機能を観察



管理栄養士が、頸部筋の硬さを触って確認



言語聴覚士が嚥下機能を評価し「口から食べる」を積極的に支援

さまざまな活動分野のなかでも「摂食嚥下」は、力を入れて取り組んでいるテーマの一つです。8年前から、岡理事長の元同僚である言語聴覚士の神代昌計さん（大阪府東大阪市、河内総合病院勤務）を招いて嚥下リハビリの勉強会を行ったり、月に2回、看護師、管理栄養士、介護職、理学療法士らが集まり施設内カンファレンスを実施してきました。ここでは、利用者の摂食・嚥下に関する問題点を検討し、実際の食事時間に神代さんが機能を評価。結果を踏まえて、誤嚥を引き起こさない食事形態に変更するほか、食べやすい姿勢に調整するポジショニング、摂食時の介助方法や嚥下リハビリについて話し合っています。

要介護度の高い高齢者には誤嚥のリスクが常に伴いますが、同園では本人や家族からの「口から食べたい」という希望があり、経口摂取機能もあると評価すれば、積極的に経口併用を行っています。その事例の一つが、アルツハイマー型認知症に伴うてんかん発作で急性期病院に入院し、退院後に受け入れた要介護5の87歳女性に経口併用を実施したケースで、高知会議で発表したものです。主治医は胃ろうの造設を勧めましたが、家族は希望

しなかったため、退院前カンファレンスで情報交換を行い、同園で鼻腔経管栄養と水分解りリーの経口併用に取り組むことを前提に、受け入れを決めました。

神代さんはこの女性について、「頸部の筋は硬いが、嚥下反射はしっかりしており、経口摂取は可能」と評価しました。ただし、頸部筋（舌骨上・下筋群）の緊張が嚥下を阻害していることから、経口摂取前に緊張を緩和するポジショニングと口腔ケア、頸部筋へのマッサージを継続的に実施するように指導し、管理栄養士や介護職が継続的にケアをすることにしました。その結果、頸部筋の緊張が緩和し、咽頭の運動性が改善。徐々にスムーズにゼリーを摂取・嚥下できるようになり、3か月後には高カロリーゼリーに変更可能となりました。退院してから5か月間で約7kg体重が増え、低栄養が大幅に改善されました。

また、要介護4の93歳の男性は、転倒による硬膜下血腫により意識レベルが著しく低下したため、鼻腔チューブを挿入した状態から、ゼリー食を用いた嚥下リハビリを1日1回スタートしました。覚醒レベル向上を目的に、



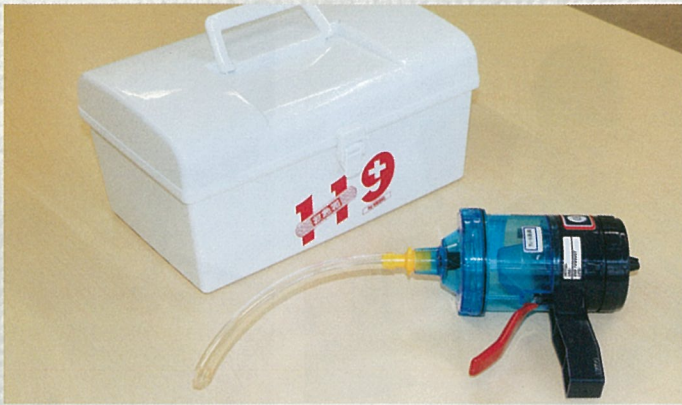
岡司理長



利用者の約8割が常食のため、注意深い観察が必要



フロアごとのデイルームで食事を楽しむ利用者の皆さん



誤嚥や窒息事故に備えて、各フロアには手動式吸引器を常備している



食事の時間は利用者とのコミュニケーションを図る時間でもある

端座位保持から歩行訓練も開始。経鼻チューブを自己抜去したのを機に経口摂食に移行すると、およそ3か月で意識レベルの改善や全身機能の回復が見られたそうです。

同園では、このように嚥下反射が比較的円滑であるにもかかわらず、食物を咽頭に送り込むことができないのは、長期間食物を口にしていけないことによる口腔機能の廃用が問題だと考え、2011年に利用者全員の摂食嚥下機能を再評価しました。その結果、嚥下障害だと思っていた利用者の多くには、咽頭期（嚥下反射）に大きな問題が見られないことがわかりました。以降、同園では、経口併用はもちろん、できる限り普通食といった食物認識が得られる形態を提供することが、舌や咀嚼のリハビリとなり、口腔機能の低下を防止することにつながると考えてケアを実施しています。その結果、経口併用だけではなく、経口移行例も多数見られるようになってきているのです。

介護のプロだからこそ 難易度の高いケアに取り組み

専門的ケアを行うことで、職員意識も変化してきた、と岡理事長は言います。

「介護職の多くは、高齢者の方々の笑顔や、『ありがとう』と言ってもらえることに大きなやりがいを感じています。それに加えて、『寝たきりだったのに、覚醒してゼリーをひと口食べた』『ゼリーひと口の嚥下に30秒かかったのに、5秒で飲み込めるようになった』な

ど、専門的ケアの成果ともいえる利用者の方々の状態改善が見られるようになりました。食えることによって、寝たきりだった人が歩けるようになったり、意思疎通ができるようになったりするので、職員から「ありがとう、と言われる以上の喜びを感じる」という声もあがっています」

もちろん、このような摂食嚥下ケアを行うにあたって、リスクマネジメントは欠かせません。誤嚥や窒息事故に備えて、急変時対応マニュアルを作成したり、急変時対応セミナーを開催するなど、リスク対策に努めています。研修では背部打法ハイムリック法や、口腔内の異物を除去する手動式吸引器、胸骨圧迫法（心臓マッサージ）の実技を学び、緊急時に対応できるようにしています。実際に、これらの救急対応によって一命を取りとめたケースもあります。

難易度の高いケアをあえて行う理由を、岡理事長はこう話します。「事故が怖いからと経口摂取をやめたら、高齢者の残存能力を低下させ、自立を阻害することになってしまいます。それに、私たちがめざす質の高いケアとは、



8年前から摂食・嚥下ケアにかかわる言語聴覚士の神代昌計さん

医学的根拠に基づいた ケアを実践していきたい

● FILE 99 / 介護職副主任

西 裕也さん



にし・ゆうや ● 鮮魚店を自営するなかで高齢者と接する機会が多かったことから、ホームヘルパー2級(現・初任者)研修を受講。社会福祉法人黒潮園で実技研修を行い、研修終了後の2000年8月に入職。デイサービス担当員などを経て、現在、介護職副主任として、重度利用者が多いフロアで勤務

法 人内では、医学的根拠に基づくケア実践のため、月に3〜4回、さまざまな研修や勉強会が行われるので、積極的に参加しています。

学んだことを実践すると、それまでおむつをしていただけの方がトイレで排泄できるようになったり、食べ物を飲み込めなかった方が嚥下できるようになったりして、ケアの成果を実感できます。高知会議で事例発表した87歳の利用者さんに対しても、低栄養を改善できると信じてケアに取り組みました。

最近では、「この利用者さんの症状には、こういうケアが必要ではないか」と、根拠をもって考えられるようになり、学んだ知識と技術が最適なケアの選択につながっていると思っています。これからの、医学的根拠に基づいた専門的な介護を実践していきたいです。

難易度の高いケアにも 多職種連携で取り組む

● FILE 100 / 管理栄養士

長尾善子さん



ながお・よしこ ● 名古屋市の特別養護老人ホームで管理栄養士として約10年間勤務。2009年1月に社会福祉法人黒潮園に入職。栄養管理のほか、給食調理スタッフの労務管理を担当。法人内の摂食嚥下委員会に所属し、日本摂食嚥下リハビリテーション学会の勉強会やポスター発表などにも参加

生 まれ育った地元にある当園には、幼少期にお世話になった方々も入居されています。通学路で声をかけてくれたり、近所で気にかけてくれたり、どこかでお世話になった方々ばかりです。安心して当園で暮らし、食事をおいしく食べていただけるよう、郷土料理なども取り入れて栄養管理をしています。

なかには重度化が進んで、経口摂取のハードルが高い方もいらっしゃいますが、介護職や看護師、調理師、言語聴覚士、理学療法士などさまざまな職種が連携することで、難易度の高いケアでも少しずつ進めていくことができます。管理栄養士一人で行えることは限られています。連携することで利用者さんの健康状態が良くなっていくよう、今後も勉強と実践を重ねていきたいです。

摂食嚥下の医学的知識を身につけ、ケア技術を体得し、いざというときのために事故防止対策を学んでリスクを最小限に抑えたいうえで、最大限の成果を上げることです。このようなケアを実践することで、スタッフのプロ意識の醸成にもつながっています」

ケアの質を追求することで

若い世代に介護職の醍醐味をアピール

同園では、こうした専門的ケアの実践や成果は、年に1回の事例発表会を通して法人内で共有しています。人材育成・専門スキルの向上に力を入れる一方で、職員の処遇改善にも取り組んでいます。等級とキャリアアップが給与に反映されているか、モデル勤続年数における年収が適正かという視点から全職種の俸給表を見直し、介護職や調理職の給与水準を引き上げました。フルタイムのパートを廃止して全員を正職員に転換するとともに、福利厚生を充実させて、4〜6連休や有給休暇を取りやすくする環境も整えました。

「今後、ますますケアの質を問われる時代になっていきます」としたうえで、岡理事長はこうビジョンを語ります。「常に情報や技術をアップデートし、私たちがだからこそできるケアを追求していきたいと思っています。そして、若い人たちに『介護職って面白そう』『やってみよう』と思ってもらえるように情報発信をしていきたいですね。それが若い世代を介護の世界に導くことにもつながっていくはずですよ」